

北海道大野記念病院 心臓血管センター

内科・外科が密接に連携 最新技術で患者負担軽減

西区の北海道大野記念病院（齋藤孝次理事長、大川洋平院長・76床）は、がん脳卒中、心臓病の3大疾病を中心に幅広く対応。中でも中核となる心臓病治療では、心臓血管センター（山下武廣センター長）を開設し、循環器内科と心臓血管外科が密接に連携して最新の医療を提供している。

同病院は、2016年築。現名称へ変更すると脳神経外科、整形外科、チキニ、サイバーナイフ、放射線科などを追加。トモセラピー、陽子線治療装置などを含めた、全国屈指の最新機器を構築した。

最新診断機器として、256列デュアルソースCT、64列PET-CTを道内初導入したほか、30年以上にわたって乳がんには専用のマンモPETを採用。IVR（脳梗塞超急性期にCT検査とともに、血管撮影もできる最新装置）を用意した。

手術室は明るく広く、道内初の術中MRI（3テスラ）に加え、術中CTが可能なO-armも導入。ハイブリット手術室も整備し、大動脈弁置換（TAVI）で活用している。

そのほか、ロボット手術支援システム（ダビンチ）など、さまざまな最新治療を積極的に導入



ダビンチなど治療機器も充実

も今年度中に開始する予定で、患者の負担が少ないうえに、経皮的治療の充実を図っている。

こうしたチーム医療とは別に、循環器内科では狭心症・心筋梗塞などの虚血性心疾患をはじめ、心不全、不整脈、大動脈疾患、末梢血管疾患など幅広い疾患に対応。18年は、CT検査1186件、RI検査718件、PET検査213件、MRI60件、カテーター検査1188件、さらに冠動脈インターベンション治療384件、末梢血管インターベンション90件、EPS・アブレーション235件、心室再同期療法・除細動器植込み20件などの実績を残している。

また、多職種による心臓血管外科は、狭心症や心筋梗塞に対する心臓バイパス手術、弁膜症に対する弁置換術、大動脈瘤に対する人工血管置換術、大動脈ステントグラフトなどさまざまな治療を行っている。

18年の実績は、心臓血管外科の全手術412例のうち、単独冠動脈バイパス術58例（うちOPCAB40例）、弁膜症手術156例（ステントグラフト30例）、その他10例、腹部大動脈瘤51例（ステントグラフト25例）、末梢血管手術75例という実績を誇る。18年10月からは、ダビンチを使ったロボット支援下で、大動脈弁置換術を開始。手術創が小さく、術後の痛みや出血量が少ないため入院期間が短く、早期社会復帰できるのが特徴だ。

山下センター長は「内科と外科の連携の良さを生かし、継続して最新治療を導入するとともに、今ある治療技術の向上も図りながら、少しでも患者の負担を軽減できる医療を提供していきたい」と話す。

また、11年に内科、外科の医師をはじめ、麻酔科、循環器疾患診療チームと連携し、急性心筋梗塞、急性心不全、大動脈解離、急性心不全などの心血管救急疾患

に対して、365日24時間体制で対応。外科手術を含めたさまざまな治療において、術後から在宅までを見据えた長期的視野で最善の方策を選択できるように、内科、外科問わず情報共有し、検討を重ねている。

また、11年に内科、外科の医師をはじめ、麻酔科、循環器疾患診療チームと連携し、急性心筋梗塞、急性心不全、大動脈解離、急性心不全などの心血管救急疾患



TAVIはすでに100例以上を実施している

施設から紹介患者を積極的に受け入れている。不整脈に対しては、心臓電気生理学的検査（EPS）、経カテーター心臓バイパス手術、弁膜症に対する弁置換術、大動脈瘤に対する人工血管置換術、大動脈ステントグラフトなどさまざまな治療を行っている。

18年の実績は、心臓血管外科の全手術412例のうち、単独冠動脈バイパス術58例（うちOPCAB40例）、弁膜症手術156例（ステントグラフト30例）、その他10例、腹部大動脈瘤51例（ステントグラフト25例）、末梢血管手術75例という実績を誇る。18年10月からは、ダビンチを使ったロボット支援下で、大動脈弁置換術を開始。手術創が小さく、術後の痛みや出血量が少ないため入院期間が短く、早期社会復帰できるのが特徴だ。

山下センター長は「内科と外科の連携の良さを生かし、継続して最新治療を導入するとともに、今ある治療技術の向上も図りながら、少しでも患者の負担を軽減できる医療を提供していきたい」と話す。